

9 当科における総胆管結石に対する内視鏡的十二指腸乳頭切開術の検討

古川 浩一・滝澤 一休・池田 晴夫
 岩本 靖彦・渡辺 和彦・相場 恒男
 米山 靖・和栗 暢生・五十嵐健太郎
 月岡 恵

新潟市民病院消化器科

総胆管結石に対する内視鏡的十二指腸乳頭切開術(以下EST)は標準治療として国内外に広く認知されている。今回、われわれは当科で2000年6月から2005年5月まで実施した134例について検討し、治療の現状について概観するとともに、その長期予後について考察した。対象の多くが感染や黄疸を併発しており、EST前に何らかのドレナージが施行されていた。そのため、感染や黄疸などのコントロール期間を要しESTまでの入院期間は平均10.4日間であった。しかし、EST後の入院期間は手術待機のために入院継続した例を除くと平均4.7日であり、ほとんどの症例で一期的に結石を除去し、短期間の経過にて治療が終了していた。また、観察期間中の総胆管結石再発例は3例、胆管炎再燃症例は2例であった。EST単独でも総胆管結石治療として十分な長期予後も得られていると考えられた。また、医療経済の観点から今回の入院期間をふまえて治療費概算を算出し検討したのであわせて供覧する。

10 胆管空腸吻合術後晩期胆管炎の病態と治療成績

青野 高志・加納 恒久・亀山 仁史
 松木 淳・長谷川 潤・岡田 貴幸
 武藤 一朗・長谷川正樹

県立中央病院外科

胆管空腸吻合術を施行した96例を対象に術後晩期胆管炎を検証した。原疾患は悪性83例、良性13例で、急性胆道炎の診療ガイドライン(案)に従い、胆管炎の診断、重症度判定を行った。胆管炎が28例に発症し、延べ58回の入院治療を要した。全例、悪性疾患の術後で、その68%には癌再発が認められた。重症度は重症16例、中等症25

例、軽症17例であり、全例に抗菌薬治療を行い、更に胆管閉塞が認められた5例に経皮経肝的胆管ドレナージ(PTBD)を行い、うち1例に再手術を行った。また、輸入脚閉塞が認められた3例に空腸ドレナージを行った。軽症例や癌再発のない例は全例改善し退院した。一方、中等症例の92%、重症例の81%で胆管炎は改善したが、中等症例の24%、重症例の44%は原疾患により死亡退院した。胆管空腸吻合術後晩期胆管炎は悪性疾患の術後に特徴的であり、抗菌薬治療に加えPTBDや空腸ドレナージを行うことで、多くの胆管炎は制御出来た。軽症例や癌無再発例の予後は良好であったが、癌再発に関連し発症した中等症・重症例の予後は不良であった。

11 先天性胆道拡張症術後35年後に発症した胆管細胞癌の1例

高野 可赴・黒崎 功・嶋村 和彦
 小海 秀央・北見 知恵・横山 直行
 佐藤 好信・畠山 勝義・中平 啓子*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
 消化器・一般外科学分野
 亀田第一病院外科*

【はじめに】先天性胆道拡張症において胆道癌の合併はよく知られているが、分流手術後に認められた胆道癌の報告は稀である。先天性胆道拡張症に対して分流手術後35年を経過して発症した胆管細胞癌の1例を経験したので報告する。

症例は44才、男性。

既往歴：1964年(4才)先天性胆道拡張症にて胆嚢十二指腸吻合術

1968年(8才)総胆管結石症にて胆嚢摘出術、総胆管十二指腸吻合術

1970年(10才)総胆管結石症にて総胆管切除術、総肝管空腸吻合術(Roux-en-Y)

現病歴：2004年7月頃、心窩部不快感出現。10月26日近医受診し、肝機能障害指摘。精査にて肝左葉に腫瘤認められ、11月2日当科外来紹介受診。胆管細胞癌疑われ、11月29日当科入院。

検査所見：CEA 29.3ng/ml, CA19-9 1662U/L.